

大学院修了にあたり

大学院修了にあたり

顎顔面口腔外科分野 山田 茜

この度、「大学院修了にあたり」とのテーマで寄稿依頼をいただきましたので、簡単ではありますが大学院生活を振り返りたいと思います。私は新潟大学歯学部を卒業後、地元である名古屋大学医学部附属病院の歯科口腔外科で研修をしたのちに、新潟大学の大学院へ進学する道を決めました。

大学院1年目は口腔外科外来・病棟と歯科麻酔科で臨床を学びました。Hotz床の作製や全身麻酔手術のアシスタントを通して、学生の頃より興味を持っていた唇顎口蓋裂の治療を学ぶことができ非常に有意義な1年間となりました。

いよいよ大学院2年目からは口腔解剖学分野で研究が始まりました。私の研究テーマは「歯におけるNF- κ Bの役割」についてでした。具体的には、NF- κ Bを過剰発現した外胚葉異形成症モデルマウスを用いてエナメル質形成異常を引き起こす要因について解析を行うというものです。発生学の教室で、学生時代では苦手な分野で学部卒業をしたら二度と関わることのない学問だと思っていたので、基本を理解するまでとても苦労しました。

研究室では切片作りに始まり、HE染色、免疫染色、、、先生方の手厚い指導によりできる手技が増えてくるにつれて、研究テーマに対する理解も自然と深まっていくのを実感し、どんどん研究が楽しくなっていました。また、海外での学会発表の機会もいただき、著名な研究者とのディス

カッションなど、貴重な経験をすることができました。他にも、海外の街並みや食文化に触れたり、楽しいことだらけでした。研究は大変だというイメージがあると思いますが、やはり何か新しい発見をした時には大変さには代えがたい何かがあるなと感じました。研究を仕事としてしている先生方の気持ちが少しわかった気がします。

大学卒業までの6年間、研修医で1年間、さらに4年を費やし大学院へ進学することには正直ためらいもありました。また、コロナの影響もあり研究が思うように進まなかったり、4年生の集大成を発表する機会がなくなってしまったことはとても残念でしたが、それでも大学院の4年間を振り返ってみると、多くのことを学ぶ機会をいただけとても充実した日々だったと思います。本当にあっという間の4年間でした。所属科である顎顔面口腔外科の先生方、研究で大変お世話になりました口腔解剖学分野の先生方、とても感謝しております。ありがとうございました！！



2018年口腔解剖学分野忘年会

大学院修了にあたり

歯周診断・再建学分野 金子千尋

私の出身地は東京都で、出身校は東京歯科大学です。以上のように新潟大学で自己紹介をすると、「なんで新潟に来たの?」とほぼ全ての方から聞かれたように記憶しておりますが、この4年間を振り返ると、やはり新潟大学歯周診断・再建学分野の大学院に進学して良かったといえます。その大きな理由は、私が頂いた研究テーマにあります。

私の研究テーマは、ざっくり言えば「歯周炎と関節リウマチとの関連」についてです。1997年にOffenbacher先生らがPeriodontal Medicine (歯周医学) を提唱され、歯周炎と全身疾患の間には関連があるという事実は、教科書にも記載されております。しかし、「実際の臨床ではどのようなことに注意すべきか」や、「歯周炎と全身疾患はどの程度関与しているのか」など、私自身の知識が足りないことが多くありました。そんななか、指導医である小林哲夫先生や、新潟県立リウマチセンターの先生方のお力を借りながら研究を進めていく過程で、歯周治療を行うと関節リウマチの疾患活動度が低下するなどの興味深い事実を知ることができ、口腔と全身が深く関係することを目の当たりにしました。また、日本リウマチ学会学術集会に参加する機会を得ることもでき、私が想像していた以上に、医科の先生方が歯科疾患を重要視されていたことを知りました。驚いたのですが、リウマチ専門医の先生方の間では、歯

周炎が関節リウマチのリスクファクターであるという認識はすでに一般的です。このように医科歯科連携に関する知識を深めることができたのは、大学院に進学し、多くの先生方のお話を聞くことができたからだと感じております。

これからは、さらに高齢化が進み、全身的既往歴を有する患者さんが増加します。そんな時代の中、大学院で学んだ知識を活用し、患者さんの全身状態に留意できる歯科医師を目指していきたいと思っております。

最後になりますが、ご指導をいただきました小林哲夫先生をはじめ歯周診断・再建学分野の先生方、ならびに研究に協力して下さった新潟県立リウマチセンターの先生方に、この場を借りまして心より御礼申し上げます。そして、同期の仲間たち、みんながいるから頑張れたことが沢山ありました。4年間ありがとうございました。



歯周診断・再建学分野の同期と（筆者：右列手前）
2017年12月撮影

大学院修了にあたり

生体歯科補綴学分野 竹内陽香

新潟大学を卒業後、歯科総合診療部での臨床研修を経て、生体歯科補綴学分野の大学院に入学しました。気付けば新潟大学に来て11年が経とうとしています。こうして数えてみるととても長いようですが、特に大学院の4年間はあっという間に終わってしまったような気がします。

大学院で私は「チタン表面に接着するタンパク質の探索」というテーマで研究を行ってきました。デンタルインプラントの需要は増加していますが、オッセオインテグレーション成立のメカニズムは解明されていません。私の研究は、特にインプラントの埋入直後にインプラント体表面で起こる現象は何かに着目して行われました。研究は私にとって未知の世界で、初めは何をするにも手探りでどうしていいのか分からず悩むこともありましたが、それでも4年間研究を続けられたのは、指導医を始めとする沢山の先生方にご助力いただいたお陰です。私の研究を進めるにあたり、生化学分野の照沼美穂教授や早稲田大学の水野潤教授など当分野以外の先生方からも沢山の先生方からお力添えをいただきました。

当分野は臨床にも力を入れており、定期的に行

われる症例検討会では様々な意見をいただくことができました。自分では最善だと思っていた治療法でも他により良い方法があることに気付かされ、その予後も含め患者さんにとっての最善を考えることを学ぶことができました。大学という場所は多くの先生方がおり、様々な意見を聞くことのできる貴重な場です。経験を積んだ先生方から自分の治療について意見をいただけたことは、まだまだ未熟ではありますが一人の歯科医師としての成長につながったと思います。

私がまだ学生だった頃にとあるOBの先生から大学院は「考えること」を学ぶことのできる場所だ、と言われたことがあります。大学院生活を振り返ってみて、本当にその通りだと思います。研究で未知のことに対し自分なりに考えてみると、臨床で一人一人の患者さんに向きあい患者さんにとってより良い治療はないかを考えること、そういった考えることに時間を使えるのは大学院に残ったからこそできたことだと思います。4年間その環境の中で考えたこと、学んだことは今後の自分にとって大きな財産となるでしょう。

最後にこの場を借りて、4年間ご指導いただいた魚島勝美教授、秋葉陽介先生を始め、生体歯科補綴学分野の先生方、そして共同研究者の皆様に心より御礼申し上げます。

大学院修了にあたり

口腔生命福祉学専攻博士前期課程

増澤美有

「2年間なんてあっという間だよ」。2年前に大学院進学についてご相談させていただいた先生の言葉通りでした。

大学院に進学することを視野に入れたのは、学部生4年の秋頃でした。それまでは進学については全く考えていませんでしたが、卒業が近づくにつれて学び舎を離れることに不安を感じたことが進学を決めた一番の理由だったと思います。この道を選んでよかったと心から思います。

漠然とした理由で進学を決めたため、研究テーマはすぐには決まりませんでした。また、興味のある研究テーマで計画を立てても、現実的な方法をみつけることが難しく、悩むこともありました。そして、先生方との相談を重ねて、研究テーマを決めることができました。研究を一から学ぶ私にとっては、研究に使用させていただいた既存データが非常に貴重であることに気が付くまでには少し時間がかかりましたが、恵まれた環境で研究をさせていただきました。

研究は、「歯の喪失要因」をテーマとしました。歯の喪失は多くの要因が考えられる疾患ですが、その中でも今回は、高齢者に着目して口腔保健に

関する信念や口腔保健行動による影響を調査することにしました。Health Belief Model (HBM)に基づいて、対象者の口腔保健に関する信念を評価し、口腔保健行動との関連を分析しました。また、これらが歯の喪失に及ぼす影響についても分析をしました。結果は、口腔保健に関する信念や口腔保健行動が望ましい状態である者ほど、現在歯数がより多いことを示唆するものでした。

実際に研究をしてみると、分析に取り掛かるまでにも、対象者や方法の決定などいくつかの段階において、初心者の私にとってはスムーズに進むことはありませんでした。限られた時間の中での研究は、様々な制限もありましたが、大学院での経験を通して、進学前と比べて確実に物事の捉え方が変わったと思います。

大学院進学前には、進学をしたいが臨床経験も積みたいという想いに悩むこともありましたが、それを両立することのできる環境を整えていただいていることが、本大学院専攻の大きな特徴であると思います。大学院進学を考えている方には、ぜひ進学をおすすめします。大学院での研究を通して学んだことは、必ず役に立つと思うからです。

研究を進めるにあたり、ご指導をいただいた先生方に改めて御礼を申し上げます。大学院の経験を活かし、今後も精進して参りたいと思います。

令和2年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	渡辺 真光 （口腔生命科学）	Number of Remaining Teeth as a Predictor of Prospective Falls in Community-dwelling Japanese late Elderly: 1-year-cohort study (日本人地域在住後期高齢者における将来的な転倒の予測因子としての現在歯数)
博士（歯学）	永田 量子 （口腔生命科学）	Current prevalence of oral Helicobacter pylori among Japanese adults determined using a nested polymerase chain reaction assay (Nested PCRアッセイ法による日本人の口腔Helicobacter pylori の検出率)
博士（歯学）	笹川 祐輝 （口腔生命科学）	Lip-closing pressure during food intake from a spoon in normal children (健常な小児のスプーンを用いた摂食における捕食時口唇圧について)
博士（歯学）	野上 有紀子 （口腔生命科学）	Prevalence of an incompetent lip seal during growth periods throughout Japan: A large-scale, survey-based, cross-sectional study (日本における小児期の口唇閉鎖不全の有病率：大規模調査に基づく横断的研究)
博士（歯学）	竹内 陽香 （口腔生命科学）	Investigation of titanium-adhesive proteins using a nano-smooth titanium substrate (超平滑チタン基板を用いたチタン接着タンパク質の探索)
博士（歯学）	浜谷 桂佑 （口腔生命科学）	ラット垂直歯根破折修復モデルを用いた歯科生体材料に対する歯根膜組織反応の組織学的検索
博士（歯学）	山田 茜 （口腔生命科学）	Overactivation of the NF- κ B pathway impairs molar enamel formation (NF- κ B経路の過剰が臼歯エナメル質形成に異常をもたらす)
博士（歯学）	結城 龍太郎 （口腔生命科学）	Hotz床併用二段階口蓋形成手術法により管理した片側性唇顎口蓋裂患児の5-Year-Olds' Indexによる咬合評価
博士（歯学）	金子 千尋 （口腔生命科学）	Circulating levels of carbamylated protein and neutrophil extracellular traps are associated with periodontitis severity in patients with rheumatoid arthritis: A pilot case-control study (関節リウマチ患者における歯周炎重症度とカルバミル化タンパクおよび好中球細胞外トラップの血清レベルの関連：パイロットケースコントロール研究)
博士（歯学）	高見澤 圭 （口腔生命科学）	Association between serum IgG antibody titers against Porphyromonas gingivalis and liver enzyme levels: A cross-sectional study in Sado Island (血清抗 Porphyromonas gingivalis IgG 抗体価と血清肝機能マーカー値との関連性：新潟県佐渡市における横断研究)
博士（歯学）	田村 光 （口腔生命科学）	Peptides from rice endosperm protein restrain periodontal bone loss in mouse model of periodontitis (コメ胚乳タンパク質由来ペプチドは、歯周炎モデルマウスにおける歯槽骨吸収を抑制する)
博士（歯学）	都野 隆博 （口腔生命科学）	Ingestion of Porphyromonas gingivalis exacerbates colitis via intestinal epithelial barrier disruption in mice. (嚥下された歯周病原細菌Porphyromonas gingivalisは腸管上皮バリア機能の破綻を介して腸炎を増悪させる)
博士（歯学）	日吉 巧 （口腔生命科学）	Aggregatibacter actinomycetemcomitans induces detachment and death of human gingival epithelial cells and fibroblasts via elastase release following leukotoxin-dependent neutrophil lysis (Aggregatibacter actinomycetemcomitansはロイコトキシンにより好中球を溶解し、エラスターゼを漏出させることで、ヒト歯肉上皮細胞とヒト歯肉線維芽細胞に細胞剥離および細胞死を誘導する)

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	干川 絵美 （口腔生命科学）	Noninvasive measurement of cell/colony motion using image analysis methods to evaluate the proliferative capacity of oral keratinocytes as a tool for quality control in regenerative medicine （口腔ケラチノサイトの増殖能を評価するための画像解析法を用いた細胞／コロニー運動の非侵襲的測定 —再生医療用細胞品質管理ツールとして—）
博士（歯学）	松岸 葵 （口腔生命科学）	Rice peptide with amino acid substitution inhibits biofilm formation by Porphyromonas gingivalis and Fusobacterium nucleatum （コメ由来ペプチドのアミノ酸置換体はPorphyromonas gingivalis とFusobacterium nucleatumのバイオフィルム形成を阻害する。）
博士（歯学）	目黒 史也 （口腔生命科学）	Reptin regulates organogenesis via the DNA damage response in embryonic epithelium. （Reptinは胎仔上皮におけるDNA損傷応答を介して器官形成を制御する）
博士（歯学）	山崎 恭子 （口腔生命科学）	Changes in gut microbiota induced by ingested oral pathobiont deteriorate the pathology of non-alcoholic fatty liver disease in mice. （口腔由来の病原細菌による腸内細菌叢の変化はマウスにおいて非アルコール性脂肪性肝疾患の病態を悪化させる）
博士（歯学）	工藤 武久 （口腔生命科学）	Ift88 regulates enamel formation via controlling Shh signaling （Ift88はShhのシグナル制御を介してエナメル形成を調節する）
博士（歯学）	長崎 司 （口腔生命科学）	Investigation of tongue pressure and orofacial muscles' activities during swallowing in patients with mandibular prognathism （骨格性下顎前突症患者における嚥下時舌圧発現様相および顎顔面筋群筋活動の検討）
博士（歯学）	LAY THANT （口腔生命科学）	How does the ROCK inhibitor enhance osteoblastic differentiation? （ROCK阻害剤はどのように骨芽細胞分化を促進するか？）
博士（歯学）	羽尾 直仁 （口腔生命科学）	Coordination of respiration, swallowing and chewing in healthy young adults （健常若年者における呼吸、嚥下、咀嚼の協調）
博士（歯学）	吉村 将悟 （口腔生命科学）	Masticatory behavior and masticatory performance are independently associated with BMI （咀嚼行動と咀嚼能率は独立してBMIと関連する）
博士（歯学）	遠藤 諭 （口腔生命科学）	Examination of factors affecting condylar bone changes following surgical-orthodontic treatment （外科的矯正治療に伴う下顎頭骨変化に影響を及ぼす因子の研究）
博士（歯学）	羽賀 健太 （口腔生命科学）	Cancer-associated fibroblasts promote the migration and invasion of oral squamous cell carcinoma cells via the TGF- β /SOX9 axis （がん関連線維芽細胞はTGF- β /SOX9経路を介して口腔扁平上皮癌細胞の遊走および浸潤を促進する）
博士（歯学）	高村 真貴 （口腔生命科学）	A comparative study between CT, MRI, and intraoral US for the evaluation of the depth of invasion in early stage (T1/T2) tongue squamous cell carcinoma. （早期舌扁平上皮癌の術前DOI計測におけるCT、MRI、口腔内USの比較）

令和 2 年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻博士前期・博士後期課程修了者論文名

博士の専攻

分野の名称 氏名（専攻） 博士論文名

修士 倉 又 七 海 フッ化ジアンミン銀の歯根象牙質脱灰抑制効果の検討
(口腔保健福祉学) (口腔生命福祉学)

修士 齋 藤 菜 月 地域在住高齢者における口腔内の自覚症状と運動機能の関連
(口腔保健福祉学) (口腔生命福祉学)

修士 古 田 彩 佳 障害者福祉施設の通所者を対象とした口腔保健状況と実行機能の実態調査
(口腔保健福祉学) (口腔生命福祉学)

修士 増 澤 美 有 70歳地域在住高齢者の口腔保健に関する信念および行動が歯の喪失に及ぼす影響
(口腔保健福祉学) (口腔生命福祉学)

博士 森 下 志 穂 Relationship between mortality and oral function of older people requiring
(口腔保健福祉学) (口腔生命福祉学) long-term care in specific rural area of Japan: A 4-year prospective cohort
study
(中山間地域における要介護高齢者の生命予後と口腔機能との関連：4年間の前向き
コホート研究)

